

KING A NEW YEAR!

研究推進部部长 丹生憲一

年があげました。

昨年末は1年生の仲間が亡くなるという悲しい出来事があり、終業式に続くお葬式には皆さんの多くが参列し、悲しい年の終わりとなりました。新たな年を迎えられたことをありがたいと思うと同時に、あらためてご冥福をお祈りします。

昨年の一文字は「災」でした。思い返すと2月の豪雪に始まり、各地で地震、台風、大雨という天災…大火事、交通事故などの人災に見舞われた一年だったように思います。しかし、他方では本庶佑さんがノーベル賞（医学生理学賞）を受賞、大谷翔平くんや大坂なおみさんのようにスポーツ界でも世界的に目覚ましい活躍を見せる人たちが、明るいニュースを提供してくれました。本校でも運動部では少林寺拳法部が全国大会、陸上部、ワンダーフォーゲル部が近畿大会に、文化部では理科部が全国大会、美術部の酒井良輔君の作品が近畿総合文化祭に出展されるなど、多岐にわたる活躍が見られます。

探究活動では、昨年4月に「ひょうごスーパーハイスクール」の指定を受け、韓国、オーストラリアに加えて、カンボジアへの研修旅行を始めました。カンボジア研修に参加したうちの二人は、12月に「平成30年度SGH全国高校生フォーラム」へ参加し、さらに2月の「国際問題を考える日」にも出場する予定です。他の班は甲南大学主催の「リサーチフェス」にも初参加しました。今年度取り組んできた、「課題研究メソッド」を基盤にしてリサーチクエストを立てて課題研究を進めるという方法が成果を出そうとしています。さらに、今の一年生は2年がかりでこの手法に取り組む初年度となり、来年度にその成果が見られることでしょう。3月に行う「地域課題から世界を考える」には、今年から普通クラスの「総合」からも発表してもらおう計画をしています。本校の探究活動は、「これまでの探究」から「これからの探究」の過渡期にあるといえるのです。

私たちにとっての昨年の一文字は、音読みは同じ「さい」でも「際」であったと思っています。この際^{まわ}を乗り越え、「これから」に向けて、さらに推進していきたいと思いますので、ご協力をお願いします。

トビタツタ探究Ⅱ

2年1組担任 井上由希子

72回生知の探究コースの久下さん、舟川さんと、昨年12月15日に東京国際フォーラムで行われた「All Japan Super Global High School Forum 2018」に参加しました。なぜタイトルを英語で示したかということ、この1日は開会の挨拶から閉会の挨拶まですべて英語でした。このフォーラムに参加したことは、参加した生徒だけでなく私にとっても、貴重な経験となりました。

まず午前中はポスターセッションです。Instagramにもアップしましたが、当然発表も質疑応答もすべて英語です。本校の発表テーマは「カンボジアの有機的ネットワークから見た日本が抱える教育問題を解決する糸口」で、子どもを育てるコミュニティについて日本とカンボジアの現状を比較し、日本が抱える教育問題の考察をし、解決策を考えています。2回の発表を終えた後、アドバイザーの方に「カンボジアから学んだことを丹波の教育に活かそうという考え方が素晴らしい。丹波をととても大切にしているのですね。」と言っていただきました。私たちは、地域から世界を考え、そこで得た気づきをまた地域に活かしていくことが、グローバルなものの考え方であるのではないかと感じました。他校の発表を見ていても、海外でのフィールドワークを行うだけでなく、そこで得られたヒントを身近な課題の解決に活かしていく内容の発表が多かったように思います。文部科学大臣賞に輝いた発表は、絶滅の危機にあるアイヌ語や文化をより日常で触れるためにどうすればいいのか、ニュージーランドのマオリ族との交流などを通して探究している内容でした。英語での発表や質疑応答は難しく、とても緊張していましたが、終わった後はもっと自分たちのテーマを深めたいという意欲が高まっていたように思います。

午後はディスカッションでした。10項目のトピックに分かれてディスカッションを行いました。各トピックの中でさらに4つのグループに分かれ、テーブルごとに3つの質問について協議しました。



本校が参加したトピックは「貧困」だったので、「世界の貧困に関する問題の中で重要なものは何か?」「それらに共通する原因や課題として何が考えられるか?」「貧困に関する問題を解決するために、高校生の私たちに何ができるか?」について考え、発表しました。ここでは、考えを英語で伝える難しさを痛感するとともに、他校の生徒の英語力に圧倒されました。そして、メイン会場に戻り、各トピックで協議した内容をもとに「持続可能な社会をつくるために、高校生の私たちに何ができるか?」という大きな問いでフリーディスカッションを行いました。2人のファシリテーター(生徒)が進行を担当し、発言者は挙手によって決められるものでしたが、続々と手が挙がり、様々な視点から問いに対して協議しました。このディスカッションには、海外からの留学生も参加していました。

最後は、表彰と講評です。講評の中で特に心に残ったキーワードは、「グローバルリーダーとグローバルリーダー」です。地球規模の視野で考え、地域視点で行動する、という考え方をいいます。そのためには、4つのレンズ(総合的レンズ・文脈的レンズ・批判的レンズ・変容的レンズ)が大切であり、同世代と世代間のコミュニケーションが大切です。2015年に国連総会で採択されたSDGs(持続可能な開発目標)を達成するために、高校生として何ができるのか考える必要があります。

Be the change you want to see in the world. (Mahatma Gandhi)



12月13日(木) 第1学年探究 第18回

研究推進部副部長 土元優一

「リサーチ・レポートには種類とレベルがある」

前号で紹介した、高畑先生を招いての特別講義は2部構成で行われました。

(1) 課題研究におけるリサーチの進め方とレポート作成についての総論的な内容

(2) 各グループが取り組んでいる内容についてのプレゼントについて、ヒント・アドバイスになるような各論的内容

前半の講義の中で、リサーチの4段階のレベルが紹介されました。この順番に研究としてのレベルが上がっていくということです。

レベル1(論点整理型): これまでのリサーチの流れを整理する

レベル2(サーベイ型): 「何が未解決の問題か」をさがす

レベル3(現場分析型): サーベイで浮かび上がった対立する議論の是非を、何らかの基準で比較検討する

レベル4(政策・企画提言型): 分析結果を具体的な提案に落とし込む。実行体制や実施にあたって予想される問題点等も含めた新提案を目指す。

後半のアドバイスでは、事前に知らせていた各研究に対して、高畑先生独自に調査され、多くの先行研究や課題を明らかにしていただきました。各グループに返されるアドバイスの多くは

「テーマを絞る(=明確化する)」ことが必要。それに沿った(一貫した)「ストーリー」をつくろうでした。いろいろなことを調べていく中で、情報を整理し、自分立ちが取り組もうとしている課題を明らかにしていく作業が必要だということです。

取り組む課題を解決することで、どのように社会的貢献を果たすのかについて、見通しを持った研究をスタートしてください。

*紙面の都合で、甲南大学「リサーチフェス」については次号でお伝えします。